

# 2007年度卒業研究ゼミ合宿の目的と効果

宮重 徹也\*

## Objectives and Effects of Miyashige Seminar Camp in 2007

Tetsuya MIYASHIGE

### 目次

1. はじめに
2. 2007年度卒業研究ゼミ合宿の概要
3. 卒業研究報告会の目的と効果
4. アステラス製薬株式会社本社への企業訪問の目的と効果
5. 株式会社日立製作所本社への企業訪問の目的と効果
6. おわりに

### Abstract

This paper is Camp Report of Miyashige Seminar in 2007. Students joining my seminar had a debrief session about their study and they visited to Astellas Pharma Inc. and Hitachi, Ltd.

### 1. はじめに

筆者は経営戦略や企業倫理（CSR）を専門分野とする研究者であるため、富山商船高等専門学校国際流通学科における筆者の卒業研究ゼミナールでは、学生たちは経営戦略や企業倫理（CSR）に関連するテーマの卒業研究に取り組むことになる。

経営戦略は競争力を持つ企業の特徴を明らかにしようとするものであるが、現在の主要な理論研究では、その競争力の源泉を企業内部に求める理論が主流である。例えば、ジェイ・バーニー（Jay B. Barney）は競争力の源泉を企業内部の希少かつ模倣困難な「リソース（resource）」や「ケイパビリティ（capability）」に求めるリソース・ベースド・ビュー（Resource Based View）を提唱しており<sup>(1)</sup>、ゲイリー・ハメル（Gary Hamel）とプラハラード（C. K. Prahalad）は競争力の源泉を企業内部の「コア・コンピタンス（core competence）」に求めるコア・コンピタンス経営を提唱している<sup>(2)</sup>。また、野中郁次郎と竹内弘高は競争力の源泉を企業内部で新たな知識が創られる「知識創造」に求めており<sup>(3)</sup>、ピーター・ドラッカー

（Peter F. Drucker）は知識という第一義的な資源を担う企業内部の「知識労働者」に求めている<sup>(4)</sup>。筆者自身もこのような理論研究に基づいて、医薬品企業の競争力の源泉を企業内部の「倫理的企業文化」に求めた実証研究をまとめている<sup>(5)</sup>。

筆者のゼミナール（宮重ゼミ）では、このような理論研究に基づいて、現実に即した論理の明快な卒業論文の作成を目標としているが、学生たちは企業内部に直接触れる機会が少なく、企業内部の暗黙知を理解できない状況にある。

そこで、宮重ゼミでは、このような企業内部の暗黙知を修得することを目的として、2004年度から卒業研究報告会と企業訪問を含むゼミ合宿を実施することにした<sup>(6)(7)(8)(9)</sup>。本稿では特に2007年度のゼミ合宿の目的と効果について報告を行う。なお、2007年度ゼミ合宿に参加した3・4年生の目的と効果については、別途、報告を行っている<sup>(10)</sup>。

2007年度における5年生の卒業研究報告会と企業訪問の目的は、それぞれ次の通りである。

卒業研究報告会の目的は、論理の明快な卒業論文を

作成するために、提出期限までの時間に余裕のあるこの時期に、卒業研究の論理の明快でない箇所を見直すことにある。従って、この報告会では報告学生は自分の卒業研究を論理的に説明し、報告を受ける学生は論理の明快でない箇所や不完全な箇所を指摘することが求められる。これらの作業を通して、各自の卒業研究の論理が明快となるように見直していく。

企業訪問の目的は、次の2点である。第1に、企業を訪問して、企業内部の状況を肌で感じることによって、文献や講義からは得ることのできない暗黙知を修得することである。従って、この経験から、これまでの形式知を教授する文献や講義だけでは修得できなかった暗黙知を修得することを目的としている。第2に、学生は将来、企業などの組織へと就職することになるため、卒業研究という観点からのみではなく、働く場所という観点からも企業を理解することである。

本稿では、2007年度卒業研究ゼミ合宿の事例から、学生たちから提出されたレポートに基づいて、このような目的の効果が得られたことを検証していく。

## 2. 2007年度卒業研究ゼミ合宿の概要

本章ではゼミ合宿の概要をまとめておく。2007年度ゼミ合宿は7月31日から8月2日までの2泊3日で、5年生のゼミ生7名、4年生のゼミ生2名、3年生のゼミ生3名の合計12名の参加のもとに実施した。

夏休み期間中ということもあり、1日目は避暑地である白樺高原へと移動して、その白樺高原において、卒業研究報告会を実施した。2日目は高原での散策時間を設けた後、訪問先企業の企業調査報告会を行った。3日目は朝に東京へと移動し、アステラス製薬株式会社東京本社CSR室と株式会社日立製作所東京本社CSR推進部を企業訪問させて頂いた(表2-1参照)。

表2-1 2007年度ゼミ合宿の日程表

○7月31日(火)	
富山 6:31	JR北陸本線・普通
7:51	糸魚川 8:15
	JR大糸線・普通
9:17	南小谷 9:34
	JR大糸線・普通
11:34	松本 11:47
	JR中央本線・普通
12:25	上諏訪/上諏訪駅
13:50	諏訪バス
15:00	東白樺湖
	卒業研究報告会
○8月1日(水)	
	白樺高原・白樺湖・霧ヶ峰高原 自由散策
	企業調査報告会
○8月2日(木)	
東白樺湖 7:10	諏訪バス
7:58	茅野駅/茅野 8:29
	JR中央本線・特急スーパーあずさ6号
10:38	新宿
	JR中央・総武線
	新日本橋

12:00~14:15	アステラス製薬株式会社東京本社 CSR 室 訪問 新日本橋 — JR総武・山手線 — 秋葉原
15:00~17:30	株式会社日立製作所東京本社 CSR 推進部 訪問 秋葉原駅で解散

## 3. 卒業研究報告会の目的と効果

本章では、学生たちから提出されたレポートに基づいて、卒業研究報告会の目的とする効果が得られたことを検証していく。

宮重ゼミでは、4年後期の流通ゼミナール(プレ卒業研究)から、卒業研究の論理性について学習を進めているが、5年生の夏休みの時点では、卒業研究の論理が未だ不明確な学生が多数である。

そこで、卒業研究報告会の目的は、論理の明快な卒業論文を作成するために、提出期限までに時間的な余裕のあるこの時期に、卒業研究の論理の明快でない箇所や不完全な箇所を見直すことにある。従って、この報告会では、報告学生は自分の卒業研究を論理的に説明し、報告を受ける学生は論理的に明快でない箇所や論理の不完全な箇所を指摘することが求められる。これらの作業を通して、論理の明確な卒業論文が作成できるように見直していく。7名の5年生の卒業研究報告会のタイトルは表3-1の通りである。また、卒業研究報告会の翌日に実施した企業研究報告会の概要は、表3-2の通りである(写真3-1, 写真3-2参照)。

表3-1 卒業研究報告会の報告内容

7月31日(火)

報告時間	報告者氏名	報告タイトル
15:35~16:35	畑野智子	倫理的な企業による人材の獲得—化粧品産業の事例—
16:35~17:20	道音由里	ワーク・ライフバランス施策による人的資源の獲得—総合電機メーカーの事例—
17:25~18:05	海老絢乃	研究開発志向型製薬企業におけるR&D戦略の変遷
18:05~18:35	高木 聡	人的資源の獲得と個人の参加動機づけ要因(仮)
18:35~19:00	高木梨沙	製薬企業におけるイノベーションの決定要因
20:45~21:40	中江夏希	ジェネリック医薬品企業の経営戦略
21:40~22:30	杉森文香	日本における医薬品企業の合併効果

表3-2 企業研究報告会の報告内容

8月1日(水)

報告時間	報告者氏名	報告タイトル
17:05~19:05	全学生	アステラス製薬の企業調査内容
20:40~22:10	全学生	日立製作所の企業調査内容



写真3-1 卒業研究報告会の風景 (1)



写真3-2 卒業研究報告会の風景 (2)

次に、学生たちから提出されたレポートに基づいて、卒業研究報告会の目的とする効果が得られたことを検証していく(表3-3参照)。

表3-3 卒業研究報告会参加の感想

国際流通学科5年 海老 絢乃  
 今回の卒研報告会は、普段のゼミとは違った環境やメンバーで議論することで、違った視点からの意見をもらったり考えたりすることができ、充実した時間であったように感じる。

この報告会で思ったことは、最初から1人1時間程度を目安にしていたからか、私を含め5年生みんなが自身の研究の背景や目的、研究成果等を1つ1つ丁寧に、深くわかりやすく説明をしていたということだ。普段の学校でのゼミでは、7人で1コマを分けなければならないため、他のゼミ生がどのような研究をどこまで進めているのか、正直わかっていなかった。このことから、今回の報告会は充実

していると感じられた。

私自身の卒研では、現在、「研究開発志向型製薬企業におけるR&D戦略の変遷」というテーマの下で研究を進めている。製薬企業においてR&D活動は最も重要であるが、企業はその規模の拡大に伴ってR&D戦略の重点を、研究から開発へと移行することを明らかにすることが目的である。また、このことを明らかにするために米国メルク社とアムジェン社の事例調査を行う。

1時間にも満たない時間ではあったが、意見や質問を聞くことで自身の卒研について再確認することができた。今後は事例調査、そして先行研究のレビューを続けていきたい。

国際流通学科5年 杉森 文香

私は先行研究のレビューからではなく実証研究から卒研を進めていたので、正直何を発表したらいいのか分からず、まとまりのない報告になってしまった。その点では少し後悔の残る卒研報告会になってしまったが、皆の報告を聞いたことで卒研に対するモチベーションが上がったので、それだけでも報告会に参加する意味はあると思った。

個人的には畑野さんの発表がよかった。一番始めの発表ということもあって緊張していたと思うが、きちんと自分の研究と向き合っているように感じた。医薬品関係の研究と違って畑野さんや道音さん、高木君の研究は大変なことも多いと思うが、その分自分なりにその研究に対して深い考えを持っていることが分かって、自分も頑張らなくてはならないと思った。

また、報告会で一番驚いたことは、高木君が歩く辞書のように何でも知っていたことだ。どんな言葉の定義も分かりやすく説明してくれて、単純に凄いと思った。私は自分の報告の際に基本的な言葉の定義の質問にも上手く答えられなかったので、自分の論文に使う言葉にもっと責任を持たなくてはならないと思った。

この報告会に参加して自分が今後やらなくてはならない課題が少し見えたので、夏休み中に出来るだけ進めていきたい。

国際流通学科5年 高木 聡

卒業研究報告会ではゼミ生が各々卒業研究の概要を報告した。私の報告については特に批判や意見などもなく議論の盛り上がりには欠けるものだったと思う。

しかしながら、この議論から何も得るものがなかった訳ではない。特に下級生からの質問からは発見が得られた。自分としては、ある概念や用語を一般的なものだと思って発言しても実際には理解されないということが度々あり、いくつか質問を受けた。例えば、ポジショニング・アプローチや期待理論についての質問がそれである。これに対して発言者である私は説明をしなければならない訳であるが、基本的な概念でも案外説明が難しいということに気付かされた。このことから私は自分の理解の甘さを痛感したとともに、これまで自分がいかに狭い領域で議論をしてきたかということがわかった。

内輪だけにしか理解されない議論というのは意義の薄いものだと思う。そのため広く理解される議論を展開するためにも、自己の理解を深め、言葉を吟味しなければならないということが課題として浮かび上がった。こういったことを踏まえて今後の論文執筆を進めていきたいと思う。

国際流通学科5年 高木 梨沙

卒業研究報告会では、自分の研究の「製薬企業におけるイノベーションの決定要因」について、論文構成、研究背景、研究目的、現在研究してわかっていることの4点について報告した。

論文構成、研究背景、研究目的は、特に問題はなかった。3章「先行研究の調査」では、勘違いしていた部分があり、教官に指摘していただき、理解できた。また、富山化学工業株式会社を事例に取り上げる、4章「実証研究」では、「企業規模がそれほど大きくないにもかかわらず、新薬を多くだしている」「プリズムの調査で『開発・研究』部門で9位に入っている」「販売部門を分離し、研究開発を中心に取り組んでいる」という3つの選定理由を記述することを確認した。

研究についてまとめ、報告することで、自分の研究への理解をより深めることができたと思う。また、他人から質問されたり、指摘されたりすることで、自分では気づくことができなかった矛盾点や曖昧な部分を知ることができた。これを改善することでさらに良い研究ができれば良いと思う。今後、富山化学工業株式会社にインタビュー調査を行い、まだ研究していない部分は文献を参考にし、進めていきたい。

国際流通学科5年 道音 由理

私は、「ワーク・ライフバランス施策による人的資源の獲得—総合電機メーカーの事例—」というテーマで卒業研究を進めている。「戦略としてワーク・ライフバランス施策に取り組む企業は優秀な人材をひきつける」という仮説を、事例を挙げ検証する。

憂鬱な気分のまま、論文の構成や現在の進捗状況を報告する。自分でも何を話しているのか、分からない状態だった。頭の中では分かっているつもりでも、それをうまく表現できない。それでも、教官やゼミ生の皆と議論を重ねるうちに、整理でき始める。今まで、何が分からなかったのかが、分からないくらいだった。これまで集めてきた情報に振り回され、根本的な部分を見失っていたからかもしれない。今、どの部分が不足していて、今後、何をしなければならぬのかがまとまった。

それだけではない。他のゼミ生の報告を聞いているうちに、ひらめいたり、自分の論文の不足している部分に気付いたりできた。他のゼミ生の論文内容については、知識が少ない分、一層の集中力を必要とし、疲れはしたが、一人では気付かなかったことに気付けたという点で、とても有意義なものであった。

もっと入念に準備をしておけば、より有意義な時間を過ごせたらという後悔は残る。しかしながら、明確にまとまっていなかったからこそ、指摘を素直に受け入れ、方向を定められたようにも思う。この時期に、他のゼミ生の進捗状況や論文の内容を確認できたことで、新たな発見ができ、また、とても良い刺激となった。

国際流通学科5年 中江 夏希

・自分自身の報告について

今回、報告会で教官と学生の前で発表したことで、いろいろな指摘や質問をしてもらい、自分だけでは気付かなかった新たな課題がいくつも見つかった。具体的には、論文の構成を組み立てなおせたこと、ジェネリック医薬品企業の経営戦略を探るために一般的な経営戦略についての知識が

必要と分かったこと、先行研究の章の流れが分かったことなどが収穫であった。今後は、図書やインターネットを用い、研究について基礎知識を深め、また事例研究についても進めていくつもりである。

・各自の報告について

5年生の発表は、各自テーマは違っても、基本的な論文の構成は同じなので、自分の研究でも参考にしたいと思うような報告がいくつもあった。図やグラフなどの数値データを用いた客観的なデータが自分には少ないと感じ、改善しようと思った。3・4年生からうけた質問には、自分が当たり前に使っている単語などの意味など、そういった基本的な知識が自分はまだまだ足りていないなと気付かせてもらった。論文を初めて読む人にも分かりやすい論文作りを心がけたいと感じた。

国際流通学科5年 畑野 智子

今回の報告会に参加したことで、それまではまとまっていなかった論文の構成をすっきりさせることができた。また、周囲からの指摘を受けることで、今後の研究の進め方が明らかになった。

私の論文の題目は「倫理的な企業による人材の獲得—化粧品業界の事例—」である。報告会では、理論研究の部分では、企業倫理の位置づけ、倫理的な企業の定義、倫理的な政策と企業イメージ、実証研究の部分では研究対象企業であるオルビス株式会社の選定理由、オルビス株式会社における倫理的な政策の調査内容について報告した。企業倫理は、倫理>応用倫理>…と順に範囲が狭くなっていき、一番限られた位置にあるのが企業倫理である。倫理的な企業とは、コンプライアンスはもちろん、それ以外の部分でもステークホルダーに貢献している企業のことだと考えると報告した。そして、このような企業は周囲に悪いイメージを持たせにくいのではないかと考える。実証研究の企業選択には、株式会社毎日コミュニケーションズが行っている大学生就職人気企業ランキングを参考にした。対象企業の倫理的な政策に関しては、他社と比較して検証する。

論文の内容を言葉にして他人に報告することによって、自分でも改めて論文の流れや調査不十分な部分を確認することができ、よかったと思う。今回指摘された内容を活かし、今後の執筆をスムーズに行えるよう努力したい。

この表3-3から、5年生のゼミ生7名各々が、各自の卒業研究の論理の明快でない箇所や不完全な箇所気付いたことが示され、卒業研究報告会の目的とする効果が得られたことが検証された。

#### 4. アステラス製薬株式会社本社への企業訪問の目的と効果

本章ではアステラス製薬株式会社本社CSR室への企業訪問の概要と目的を述べた後、学生たちから提出されたレポートに基づいて、企業訪問の目的とする効果が得られたことを検証していく。

宮重ゼミでは、ゼミ合宿3日目の2007年8月2日(木)12時00分～14時15分までのおよそ2時間強にわ

たって、アステラス製薬本社CSR室を企業訪問させて頂いた。

アステラス製薬は、武田薬品工業、第一三共とともに、日本のビッグスリーを構成する製薬企業である。加えて、BERCに加盟するなど、積極的に企業倫理の浸透を目指している企業であるため、今回は企業倫理担当部署（CSR室）を企業訪問させて頂いた（表4-1、写真4-1、写真4-2参照）。

アステラス製薬への企業訪問の目的は、次の2点である。第1に、企業を訪問して、企業内部の状況を肌で感じることによって、文献や講義からは得ることのできない暗黙知を修得することである。特にアステラス製薬は積極的に企業倫理の浸透を目指しているため、企業倫理やCSRに関連する暗黙知の修得を目的とした。第2に、学生は将来、企業などの組織へと就職することになるため、卒業研究という観点からのみではなく、働く場所という観点からも企業を理解することである。

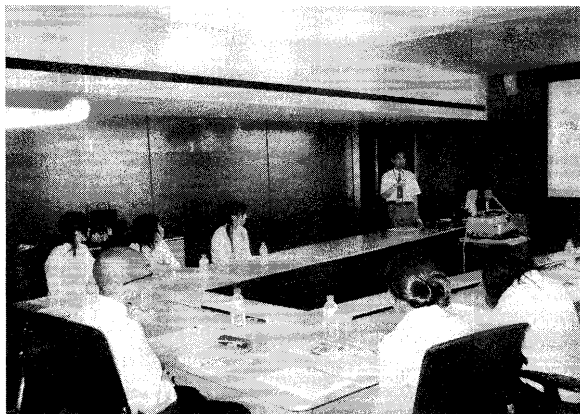


写真4-1 アステラス製薬本社への企業訪問風景 (1)



写真4-2 アステラス製薬本社への企業訪問風景 (2)

表4-1 アステラス製薬本社訪問の内容

歓迎のあいさつ（CSR室長 竹歳隆一様） アステラスのCSRと企業倫理（同 竹歳隆一様） 製薬業界の概要 アステラス製薬の概要 CSRへの取り組み 企業倫理の推進 CSR室の仕事内容 適時質疑応答（同 竹歳隆一様）
--

次に、アステラス製薬に企業訪問させて頂いた学生たちのレポートに基づいて、アステラス製薬への企業訪問の目的とする効果が得られたことを検証していく（表4-2参照）。

表4-2 アステラス製薬本社訪問の感想

国際流通学科5年 海老 絢乃

自分の卒業研究のテーマが製薬企業に関するもののため、業界の概要は多少知ってはいたが、製薬企業がいったいどのような所なのか、アステラス製薬を企業訪問するまでは全く想像もつかなかった。むしろ、私の中の製薬企業はそれまで、研究所のイメージのほうが強かった。

アステラス製薬は、2005年4月に旧山之内製薬と旧藤沢薬品が合併して発足し、国内第3位の企業である。今回の訪問では、そのアステラスのCSRと企業倫理について話を聞かせていただいた。

アステラスでは、合併した当日、社員全員に経営理念や企業行動憲章等が明記された“アステラス C-file”が配布されたそうだ。C-fileのCはCSR, Compliance, Charter, Code of Conductを意味し、“C”で始まる要素が盛り込まれている。また、社員はそのC-fileの携帯版を常に持ち歩いているそうだ。現在のアステラス製薬には旧山之内製薬出身と旧藤沢薬品出身の社員が共に働き、両社の社員が共通の経営理念の下、新たなアステラスという会社を共につくっていている、ということが感じられた。

今回の訪問を通して、実際に製薬企業の本社を訪問し、企業について話を聞かせていただいて、今まで未知だった会社の雰囲気や、CSRについて理解を深めることができた。また、薬をつくるという仕事は、長い年月を要し、いろいろな法律に縛られ、他の業界とは全く違うということに改めて実感した。

国際流通学科5年 杉森 文香

アステラス製薬に入ったときの第一印象は、清潔なイメージだった。企業訪問の前に宮重教官から「建物の中に入るだけでなんとなく分かるから。」と言われたことが、実際に入って何となく分かったような気がした。

アステラスの方からの事前のプレゼンテーションはとても分かりやすく、不祥事に関してもしっかりと説明があって、良い印象を受けた。また、私たち学生に対しても質問しやすい雰囲気をつくってくれたように感じた。個人的には、CSR活動だけでなく合併に関する話も多く織り交ぜてくださったので、とても参考になった。

私は医薬品関係の研究をしているので実際に企業の話を通じて直接何うということは最高のチャンスだったのだが、あま

り良い質問をすることができなかった。しかし、数字だけでは分らない合併によるプラスの効果もあることが分かった。合併によって研究開発能力が上がったかどうかという質問は、答え難い質問だったと思う。それでも丁寧に答えてくださったことがとても嬉しかったし、今回の企業訪問で自分の研究に関する貴重な話をたくさん聞くことができた。この経験を論文に生かしていきたいと思う。

国際流通学科5年 高木 聡

アステラス製薬を訪問するにあたって、ゼミ生はそれぞれ事前に企業研究を行った。そして、訪問の前日には研究の報告会が設けられた。報告会ではアステラス製薬の企業倫理、社会貢献活動、経営理念、企業合併などが議論の中心となっていた。

今回の訪問は製薬会社ということもあり、企業機密は厳しく、私たちは会議室のみを見学させていただいた。アステラス製薬の本社ビルは新しく、ハイセンスな建物であった。会議室も綺麗な作りで、調度品も洒落た物が揃えられていた。こういった労働環境のもとでは従業員も気持ちが良いのではないだろうか。

会議室ではCSR室の竹歳さんからプレゼンテーションをしていただいた。営業出身の竹歳さんのプレゼンテーションは非常にわかりやすく、長時間でも飽きさせられることのないものだった。営業職に就く上ではこういったスキルも重要になるのだろうと思った。プレゼンテーションの内容は製薬業界の概要にはじまり、CSR、企業倫理などについてであった。竹歳さんはアステラス製薬の目標として、売上高1兆円の達成、そして武田薬品を超えることを度々強調されていた。目標を設定し、それを達成しようという強い意気込みが感じられた。

発表の中心となったのはアステラス製薬のCSRや倫理についてである。竹歳さんはCSRという言葉自体は欧米から輸入されたもので、所謂流行のようなものとして捉えている。しかし、CSRのような概念はかつてから日本にも存在し、流行になる前から日本企業はそういったことを実践していたという見方をされているようだ。こういった発言からCSRに関する理解の深さが見て取れた。

アステラス製薬のCSR室の取り組みとしては、2005年の合併直後、C-fileと呼ばれる行動基準が書かれた冊子を全社員に配布し、すべての営業所で研修を実施したそうだ。また、社内にヘルプラインを設け、職務行動について倫理的な迷いがあったときには連絡するよう従業員に教育しているとのことだ。このように、実際に企業倫理の実践やCSR推進を社内に訴えかけているということが確認できた。この事実からアステラス製薬の掲げる理念、倫理というのはただの建前ではないということを感じられた。

アステラス製薬の企業訪問では、普段は見ることができない社内の雰囲気や従業員の価値観を感じることが出来た。貴重な時間を割いていただいたアステラス製薬の皆様、そして、お話を聞かせてくださった竹歳さんに感謝の気持ちを伝えたい。

国際流通学科5年 高木 梨沙

アステラス製薬を訪問し、まず会社の中に入り、堅い雰囲気を感じた。情報の流出を防ぐために、外部からの人間をなるべく進入させないようにしている、という印象を持った。CSRと企業倫理についてのお話は、製薬業界の概要から、アステラス製薬の概要、CSRと企業倫理の取り組

みまで細かく説明していただいたため、予備知識があまりなかった私たちでも理解することができたと思う。

特に企業倫理についてのお話が興味深かったが、企業倫理というものははっきりと決められたものではなく、曖昧なものだと感じた。「信用創造は長年月、信用喪失は一瞬」という言葉が印象的だった。

私は、CSRや企業倫理についてではないが、製薬業界について卒業研究を行っているので、製薬業界について少しでも知ることができてよかった。これからの卒業研究に活かしていきたいと思う。

国際流通学科5年 道音 由理

アステラス製薬を訪問し、まず、広いロビーから道路を目隠しするように見える、涼しげな竹林が目飛び込んだ。落ち着いた雰囲気の家社だと感じた。

CSR室の竹歳さんから、アステラス製薬のCSR活動と企業倫理に関する取り組みについて、お話ししていただいた。節々から、アステラス製薬4つの信条の内の2つ、「高い倫理観」と「競争の視点」を感じ取ることができた。業界の特性もあるかもしれないが、企業倫理に取り組む意欲、意識の高さがひしひしと伝わってきた。

実際に取り組んでいらっしゃる具体的なお話を伺って、「企業倫理」というものを、本を読んで仕入れた知識とは一味違った、身近なものとして捉えることができた。良い勉強となった。社員の方しか分からないようなエピソードなど、生きた情報を伺うことができ、とても有意義だった。

企業倫理という曖昧なものに、手探りながら真剣に向き合って、取り組んでおられる竹歳さんの姿がとても印象的でかっこいいあと感じた。その姿勢は、これから社会人になる私にとって、良いお手本として見習いたい。

また、CSR室での活動は、営業や開発などのハード面とは違い、直接的で分かりやすい成果がでるとは限らない。そのようなソフト面から、会社を支えることは大変だろうが、とてもお仕事を楽しんでいらっしゃるように感じ取れた。そのような方のお話を伺うことができ、本当に良い経験になった。

国際流通学科5年 中江 夏希

アステラス製薬では、主にCSRへの取り組みと企業倫理の推進といったテーマでお話を聞くことができた。

CSRについては、大変熱心に考えていらっしゃる様子うかがえた。近江商人の経営理念である「売りよし、買い手よし、世間よしの三方よし」をアステラス製薬のCSRについての考え方に反映させておられる点が特徴的であると感じた。アステラス製薬は、企業は社会からの要請に応えることで存在価値が評価されるという考えであり、顧客、社員、株主、環境・社会からの需要に応答していくことでCSRを考慮した経営をし、持続可能な発展を可能にしていくという考え方であることがお話から伝わった。そのため、ボランティア活動や寄付活動など、社会貢献活動も盛んである。

企業倫理の推進については、製薬業界の過去の企業不祥事などを取り上げ、さまざまな業界団体が企業倫理について定めていること、そしてアステラス製薬の企業倫理についての取り組みについてお話を聞いた。アステラス製薬では、全社員に対して少人数双方向型研修を行い、自社の企業倫理の定着徹底を行っており、企業をあげて企業倫理に力を入れていることが伝わった。

訪問しての印象としては、清潔感があり、社会活動にも熱心で、製薬会社としては最高のイメージがあったと感じた。

国際流通学科5年 畑野 智子

各自、事前にアステラス製薬株式会社（以下、アステラス製薬）の企業研究をし、経営戦略や環境活動の取り組み、社会貢献活動などについて知識を得た。今回の訪問では、製薬業界の概要やアステラス製薬のCSR、企業倫理などについて話していただいた。

アステラス製薬では、自社のCSRはヨーロッパから来た概念ではなく、250年以上前の日本の近江商人の経営理念からやってきたと捉えている。なので、近年はやっている活動ではなく、前々から行われているものだという。また、事前の企業研究や訪問、CSR報告書を読んでみて、アステラス製薬の社会貢献活動は特徴的なものが多いと感じた。

企業倫理に関しては、双方向型研修という、ケースを使用したグループディスカッションを行っている。ディスカッションは少人数制で行われる。この活動を通して、企業倫理についての理解を深めることが期待されている。この研修は全従業員が対象であり、企業倫理を徹底させようとしている姿勢がうかがえた。

また、製薬業界の概念についての話にも関心を持った。今まで製薬業界とのかかわりがほとんどなく知識も浅かったのだが、話を聞くうちに少し興味がわいた。病院では医師が薬を処方するため、製薬会社は薬を使用する患者と直接接している訳ではないが、その薬には本当に多くの製薬関係者の努力があるということが分かった。

アステラス製薬は2005年に合併してできたばかりの企業なので、今後のCSRや企業倫理に関する活動に注目したいと思う。

この表4-2から、アステラス製薬本社CSR室への企業訪問において、社員の方々や会社の様子などに直接触れることによって、文献や講義からは得ることのできない暗黙知、特に企業倫理やCSRに関連する暗黙知を修得できたことが示された。また、企業を働く場所という観点から理解できたことも示された。

従って、学生たちから提出されたレポートに基づいて、アステラス製薬本社CSR室への企業訪問の目的とする効果は十分に得られたことが検証された。

#### 謝辞

今回の企業訪問にあたり若輩者である私の依頼を快く引き受けて下さり、また当日大変有意義なご講演を頂きました総務部CSR室長の竹歳隆一様、当日ご丁寧な対応を頂きました同室課長の高田暢久様に厚く御礼申し上げます。

### 5. 株式会社日立製作所本社への企業訪問の目的と効果

本章では株式会社日立製作所本社CSR推進部への

企業訪問の概要と目的を述べた後、学生たちから提出されたレポートに基づいて、企業訪問の目的とする効果が得られたことを検証していく。

宮重ゼミでは、ゼミ合宿3日目の2007年8月3日（木）15時00分～17時30分までの2時間30分にわたって、日立製作所本社CSR推進部を企業訪問させて頂いた。

日立製作所は日本最大級の企業規模を誇る企業であるだけでなく、ECTMに参加するなど、積極的に企業倫理の浸透を目指している企業であるため、今回は企業倫理担当部署（CSR推進部）を企業訪問させて頂いた（表5-1、写真5-1、写真5-2参照）。

日立製作所への企業訪問の目的は、次の2点である。第1に、企業を訪問して、企業内部の状況を肌で感じることによって、文献や講義からは得ることのできない暗黙知を修得することである。特に日立製作所は積極的に企業倫理の浸透を目指しているため、企業倫理やCSRに関連する暗黙知の修得を目的とした。第2に、学生は将来、企業などの組織へと就職することになるため、卒業研究という観点からのみではなく、働く場所という観点からも企業を理解することである。

表5-1 日立製作所本社訪問の内容

社員食堂の見学 (品質保証本部 喜古俊一郎様)
歓迎のあいさつ・自己紹介 (品質保証本部 喜古俊一郎様、コーポレート・コミュニケーション本部 浜岡伸夫様、佐藤亜紀様)
日立製作所の概要説明と業務内容 (品質保証本部 喜古俊一郎様)
日立製作所におけるCSRへの取り組み (コーポレート・コミュニケーション本部 浜岡伸夫様、佐藤亜紀様)
質疑応答 (品質保証本部 喜古俊一郎様、コーポレート・コミュニケーション本部 浜岡伸夫様、佐藤亜紀様)



写真5-1 日立製作所本社への企業訪問風景(1)



写真5-2 日立製作所本社への企業訪問風景(2)

次に、日立製作所に企業訪問させて頂いた学生たちのレポートに基づいて、日立製作所への企業訪問の目的とする効果が得られたことを検証していく(表5-2参照)。

表5-2 日立製作所本社訪問の感想

国際流通学科5年 海老 絢乃

日立といえば、やはり「木」が出てくるCMのイメージが強い。次に連想するのは「Inspire the Next」というコーポレートステートメントだ。そして今回日立製作所を企業訪問し、私自身の日立のイメージがいつそう広がった。

実際に企業訪問する前日、日立について私たちはそれぞれの視点から調査し、発表をしていた。そこで議論になったのは日立の環境活動やボランティア活動などの社会活動、また、理念や経営戦略についてなどである。ここで私たちが学んだ日立という会社はCSR報告書のほんの一部で、実際の会社はどんな建物なのか、どんな社員が働いているのか全く想像もつかなかった。

そんなことを思いながら秋葉原の駅を出ると、想像以上に立派な日立が入っているビルが目の前にあって、最初から驚かされた。会社の中に入ってまず社員食堂を見学させていただいたが、その見晴らしの良い食堂や話をくださった社員の方、そしてエレベーターの中まで雰囲気が良い会社だと感じた。

プレゼンテーションでは、主に日立におけるCSRの話聞かせていただいた。環境への配慮や、病院・学校等の建設、地雷除去機の開発等いろいろな話の中でも、私は「従業員の働きやすい場をつくる」という言葉が印象に残っている。育児休職や介護休職、短時間勤務等、働きやすい職場環境の実現に力を入れているようだ。CSR報告書にあるグラフを見るだけではよくわからないが、社員食堂や社員の方々など、会社の雰囲気を実際に体感して私自身そう感じた。

ほんの2時間ほどの時間ではあったが、社員の方から生の話を聞くことができ、今までよりもCSRに対する理解、また、興味も深くなったように感じる。

国際流通学科5年 杉森 文香

日立は秋葉原駅の目の前にある大きなビルの中にあり、一番始めに見学させていただいた食堂からの眺めが最高だっ

た。花火大会の日は抽選で見物ができたり、夜にはバーに変わったりするという話を伺って、食堂が社員の方々にとって憩いの場だということが分かったし、会社という場の雰囲気も味わうことができた。

日立の企業訪問では、日立がCSRに関する取り組みにとっても積極的で、社会に貢献することを第一に考えている企業だということがよく分かった。特に、「CSRは最近出てきたように思われているが、この考えは昔からあるものでCSRという言葉は後から付けただけ」という話が面白かった。また、喜古さんのプレゼンテーションでは企業に関するものだけではなく、働く楽しさを織り交ぜた話を伺うことができたので、来年社会人になるにあたってとても参考になる話が聞けたと思う。

CSRについての考え方を企業の方から直接伺うことが出来たのはとても貴重な経験だったが、もっとCSRに関する知識があれば更にこの話を深く理解できたし、良い質問が思いついたかもしれないと後悔した。今後は自分の研究に関することだけでなく、幅広い知識を身につけたいと思った。

国際流通学科5年 高木 聡

日立製作所を訪問するにあたって、ゼミ生はそれぞれ事前に企業研究を行った。そして、訪問の前日には研究の報告会が設けられた。報告会では日立製作所(日立グループ)の経営理念、社会貢献活動などが議論の中心となった。

今回の訪問させていただいたのは秋葉原の社屋である。ビルは秋葉原駅の目の前で通勤に便利そうな立地だった。社内を歩いてみると整頓されていて、清潔な印象を受けた。まず、30階にある社員食堂を案内していただいた。ビルの最上階である食堂からの眺めは極めて良好であった。隅田川の花火大会を観覧するには最適とのことで、従業員の中で抽選が行われ当選者はその家族とともに観覧できるそうだ。また、夜になると食堂ではお酒が飲めるようになるとのことである。このような労働環境のもとでは、気持ちよく仕事ができるだろうと思った。

次に会議室へ移り、CSR推進部の方々にプレゼンテーションをしていただいた。最も印象に残ったのは設計出身の喜古さんのプレゼンテーションである。もともと技術者である喜古さんの言葉からは「技術を通じて社会に貢献する」という日立製作所の理念が伝わって来たように思う。また、喜古さんは日立で働くことについて、仕事そのものの魅力や人間関係が良いということを挙げられていた。こういった言葉から日立の企業文化を感じることが出来たと思う。

社内では何名かの従業員の方々に会って、様々な雰囲気の異なる人達が混在しているという印象を受けた。しかし、それぞれの雰囲気が違っていてもインフォーマルな人間関係が良さそうで、団結している印象を受けた。また、従業員の皆さんがクールビズを実践していたことも印象に残った。多少野暮ったい印象こそ受けるが、環境保護に熱心な日立製作所の価値観がしっかり反映されているのだろう。

日立製作所への企業訪問では、普段は見ることができない社内の雰囲気や従業員の価値観を感じることが出来た。貴重な時間を割いていただき、お話を聞かせてくださった日立製作所CSR推進部の皆様に感謝の気持ちを伝えたい。

国際流通学科5年 高木 梨沙

私は、2年前の愛知万博で日立製作所のパビリオンを体



験し、その時から日立製作所にはとても清潔感がある印象を持っていた。実際に、ビルは新しいため、その時の印象と変わらず清潔感のある雰囲気だった。また、私は訪問する前、「大企業＝真面目で堅い」というイメージを持っていたが、30階の食堂では夜、お酒を飲むことができたり、男性職員はクールビズのためにネクタイをしていなかったりと、私がイメージしていたよりももっとラフな雰囲気だった。

CSRの取り組みについてのお話を伺い、「2010年の創業100周年に、CSRの世界先進企業を目指す」という目標からもわかるように、CSR活動にかなり積極的なことがわかった。8つもの取り組み方針があり、社員ひとりひとりがその方針を意識し、活動に取り組んでいる印象を持った。

事前に企業研究をし、報告会をしていたため、基礎知識はあったが、日立製作所はまだまだわからないことがたくさんあり、興味深い企業だと思った。

#### 国際流通学科5年 道音 由理

日立製作所を訪問し、まず、30階の社員食堂を案内していただいた。その眺めの良さに驚かされた。外国人もちらほら見えるそこは、日立製作所社員専用の食堂で、夜間も営業しているという。先日も、社員の家族を抽選で招待し、隅田川の花火大会を鑑賞したそう。家族サービスを提供する場にもなっており、福利厚生の一部として、素晴らしい機能を果たしている。大企業であることを改めて認識した。

また、社内には、社長自らがノーネクタイで写った、クールビズを推奨するポスターが貼られている。すれ違う男性社員の誰もがネクタイをしていない。全社挙げて、積極的にクールビズに取り組む姿勢が見て取れた。

CSR推進部の方、3名から日立製作所のCSR活動についてお話を伺った。喜古さんの技術者倫理などのお話は、経験談を交えてだったこともあり、とても印象深く記憶に残っている。自分のしてきた仕事、自分が現在している仕事に対する誇りを感じることができた。また、浜岡さんのまさに「技術を通じて社会に貢献」している活動のお話からは、「日立精神」を垣間見ることができた。ビデオを使用するなどの工夫をして、理解を促そうとして下さる姿勢が伝わり、とてもありがたく感じた。そして、佐藤さんの環境への取り組みに関するお話からは、環境に対する積極的な姿勢と意識の高さを強く感じた。質問にも真摯に答えて下さり、嬉しかった。

3人のお話から「守るだけではなく攻める」姿勢を感じることができ、また、「CSR」というものに関する理解が一層深まったように思う。実際に伺ったお話を、卒業論文に最大限活かしたい。

#### 国際流通学科5年 中江 夏希

日立製作所では、主に日立製作所のCSRの取り組みについて日立グループの環境活動についてお話を聞くことができた。

日立グループは、日立グループCSR活動取り組み方針として、①企業活動としての社会的責任の自覚、②事業活動を通じた社会への貢献、③情報開示とコミュニケーション、④企業倫理と人権の尊重、⑤環境保全活動の推進、⑥社会貢献活動の推進、⑦働きやすい職場作り、⑧ビジネスパートナーとの社会的責任意識の共有化を掲げ、各項目に目標・計画をたてて取り組みを行っていることが分かった。

これらは、日立の基本理念である“和”、“誠”、そして“開拓者精神”に基づいている。日立グループは社員数が膨大であり、本当にCSRの考え方が社員全体に伝わっているのかが疑問に残った。

日立グループの環境活動では、環境マインド&グローバル環境経営、次世代製品とサービスの提供、環境に高いレベルで配慮した工場とオフィス、ステークホルダとの環境協働の4つを盛り込んだ環境ビジョンを策定し、活動を行っていることが分かった。環境にも対応した製品を作り続けることで、社会貢献もできるし企業の発展も望めるので素晴らしいことだと感じた。

訪問しての印象は、大きく、広く、世界を見ながら活動している会社であると感じた。

#### 国際流通学科5年 畑野 智子

株式会社日立製作所（以下、日立）ではまず、社員食堂に案内していただいた。社員食堂からの外の眺めはとてもよく、あのような場所で食事ができれば、仕事に対するモチベーションが変わるのではないかと思った。また、夜には食堂からバーに変わるという。花火大会の日には、抽選で社員とその家族が招待され、食堂から花火を見ることができるそうだ。社員のことが考えられていると感じた。

日立製作所では、日立の概要説明、業務紹介、CSRの取り組みについて話をしていただいた。私は事前の企業研究や今回の訪問するまで、日立がどのような企業で、どのような業務を行っているかよく知らなかった。しかし、概要や業務を説明していただいたことで、日立で行われている様々な事業を知ることができた。特に、ユニバーサルデザインに関する取り組みでは、小学生にユニバーサルデザインについて学び、考えてもらうという授業を行っている。また、地雷除去機を開発し、カンボジアやスリランカでの地雷撤去のために使用されている。このような活動を日立が行っているなんて想像もつかなかったが、社会のため、子供のためになる活動を多く行っているということが分かった。

また、今回話をしていただいた方々はみな、今の自分の仕事に自信を持っておられると感じた。それぞれが行われている業務内容を説明されるときの話し方や表情はとても明るく、楽しそうに見えた。今の自分の仕事が好きなのだろうと思った。

日立の企業訪問を通して、私も将来自分の仕事に誇りを持てるようになりたいと思った。

この表5-2から、日立製作所本社CSR推進部への企業訪問において、社員の方々や会社の様子などに直接触れることによって、文献や講義からは得ることのできない暗黙知、特に企業倫理やCSRに関連する暗黙知を修得できたことが示された。また、企業を働く場所という観点から理解できたことも示された。

従って、学生たちから提出されたレポートに基づいて、日立製作所本社CSR推進部への企業訪問の目的とする効果は十分に得られたことが検証された。

#### 謝辞

今回の企業訪問にあたり若輩者である私の依頼を快

く引き受けて下さり、また当日大変有意義なご講演を頂きました品質保証本部 QA センタ主任技師の喜古俊一郎様、当日有意義なご講演を頂きましたコーポレート・コミュニケーション本部 CSR 推進部 CSR 推進グループ主任技師の浜岡伸夫様、同グループ部長代理の佐藤重紀様に厚く御礼申し上げます。

## 6. おわりに

本稿では、2007年度卒業研究ゼミ合宿の事例から、学生たちから提出されたレポートに基づいて、ゼミ合宿の目的とする効果が得られたことを検証してきた。

最後に、このゼミ合宿に参加した5年生の感想を表6-1に示して、本稿を締めくくりにする。

なお、学生の感想は誤字・脱字を含めて、原文のまま掲載した。

表6-1 ゼミ合宿全体の感想

<p style="text-align: center;">国際流通学科5年 海老 絢乃</p> <p>私にとってこの3日間の合宿でのいちばんは、5年間の商船生活最後の夏休みに友達との楽しい思い出ができたこと、逆にいちばん辛かったのは青春18きっぷでの旅だった。合宿ということで、目的はやはり卒研の発表と企業訪問なのだが、最初は憂鬱と思っていた卒研も企業研究も、そして訪問も、終わってみれば全部自分のためになったしそれなりに楽しかったと思う。そして合宿を終えた今思うことは、卒研をもっと頑張らなければ、ということだ。今後は、まずは中間発表に向けて事例調査とレビューをしていきたい。</p>
<p style="text-align: center;">国際流通学科5年 杉森 文香</p> <p>今回の合宿は、移動が大変なことと長時間の報告会があることで正直とても憂鬱だった。しかし実際に終わってみるととても良い経験が出来たし、商船生活最後の思い出も作ることが出来たので、参加して良かったと思った。</p> <p>まず長野では、皆の発表を聞いて改めて卒研に対するやる気が出たり、教官以外の人からの質問を受けることで自分の研究で曖昧だった点が分かったり、卒研を進めていく上でプラスになる卒研報告会になったと思う。また、二日目の自由行動の時間で5年生のメンバーで思い出作りができてとても楽しかった。</p> <p>東京では本当に貴重な体験が出来たと思う。自分ですべて調べて知っていることでも、実際に企業の方から説明を受けたり考えを伺えたりすることはなかなかないチャンスだ。この経験を生かして、良い卒論が書けたらいいと思う。</p>
<p style="text-align: center;">国際流通学科5年 高木 聡</p> <p>ゼミ合宿に参加して、最も印象に残っているのはアステラス製薬、日立製作所への訪問である。私が両社から受けた印象というのは全く異なるものであった。</p> <p>企業が外部に公表する理念、CSR活動、倫理観といった類のものは、どのような会社も基本的には似通っていて、株主や顧客を意識した内容になる。アステラス製薬、日立</p>

製作所も然りである。しかしながら、実際に企業を訪問して従業員の方からお話を伺ってみると、企業それぞれの文化、価値観の違いが明確に感じることができた。これを記述することは困難であるが、私の主観として、目に見えない何かが明確に異なっているということが確認でき、企業というのはそれぞれ独自の文化、価値観を持っているということが実感できた。

このようなことを学生のうちに経験出来たことは貴重なことだろう。将来の就職活動等に今回の企業訪問で得られた知見を活かしたい。

国際流通学科5年 高木 梨沙

移動が少し辛かったが、全体としては楽しかった。晴れていたの、景色がきれいだったし、散歩を楽しめた。気候も過ごしやすく、快適だった。

2日目は自由時間が少し無駄に思えたので、2日目に東京へ移動し、夜東京で泊まり、3日目に余裕をもって企業訪問ができたら良かったと思う。当日は人身事故などの影響で時間がなくなり、昼食をとる余裕もなく、私には少し辛かった。

ゼミ合宿では、普段行くことができない場所に行き、企業を訪問し、貴重な話を聞くことができ、参加したみんなにとって有益なものだったと思う。

国際流通学科5年 道音 由理

ゼミ合宿では、良い経験ができたように思う。夏休みに自分の卒業研究を報告しあうという、いかにも学生らしいことができた。また、富山から青春18切符を利用して長野へ行き観光するという、これまた、いかにも学生らしい旅行だった。加えて、なかなか足を運ぶ機会のない大手企業にお邪魔し、人事部の方以外のお話を伺うという、就職活動中でもできないような、とても貴重な体験もできた。

学生生活最後の夏休みにこれらの経験ができたことは、意義深く、思い出深い大きな財産となった。ハブニングなどはあったものの、それらを含め楽しい合宿にして下さった、宮重教官はじめ、お世話になった皆様に感謝したい。

国際流通学科5年 中江 夏希

2泊3日のゼミ合宿は、思っていた以上に楽しく、実り多い合宿になった。今回、大企業であるアステラス製薬と日立製作所を見学させていただいて、実際に見学したことやなかなか聞けないお話を聞けたことがとてもよかったと思う。卒研報告会についても、和気あいあいとした雰囲気の中でも、しっかりと報告を行ってよかったと思う。また、就職先選びにとっても有効だと思うので、これからも積極的に3・4年生も参加するべきだと思った。夏休みに入り、勉強する意欲がなくなっていたので、今回の合宿はやる気を起こさせてくれるとてもいい合宿だった。

国際流通学科5年 畑野 智子

今回このゼミ合宿では、普段ではできないようなことを多く経験でき、よい勉強になった。特に企業訪問では、今までは知ることがなかった業界についての知識を深めることができた。訪問させていただいたアステラス製薬株式会社と株式会社日立製作所では、社員の方からこのような機会がなければ聞くことができない話をさせていただいた。また、企業のホームページなどからでは得られない情報や、それだけでは感じ取れないことや分からないことが実際に

訪問することで明らかになり、私の中でのその企業に対するイメージが具体化した。実際に自分の目で確かめることが物事の理解にどれだけ効果的かがよく分かった。とても貴重な体験ができた。

今回得られたことを、今後自分の役に立てるようにしたい。

## 注

- (1) Jay B. Barney, *Gaining And Sustaining Competitive Advantage*, Prentice Hall, 1997. (岡田正大訳『企業戦略論【上】』, ダイヤモンド社, 2003, pp.250-271.)
- (2) Gary Hamel and C.K. Prahalad, *Competing for Future*, Harvard Business School Press, 1994. (一条和生訳『コア・コンピタンス経営』, 日本経済新聞社, 1995, p.260.)
- (3) Ikujiro Nonaka and Hirotaka Takeuchi, *The Knowledge-Creating Company*, Oxford University Press, Inc., 1995. (梅本勝博訳『知識創造企業』, 東洋経済新報社, 1996, pp.352-355.)
- (4) Peter F. Drucker, *Managing in the Next Society*, Griffin, 2002. (上田惇生訳『ネクスト・ソサエティ』, ダイヤモンド社, 2002, pp.178-184.)
- (5) 宮重徹也『医薬品企業の経営戦略－企業倫理による企業成長と大型合併による企業成長－』, 慧文社, 2005, pp.86-121.
- (6) 宮重徹也「2004年度卒業研究ゼミ合宿の目的と効果」『富山商船高等専門学校研究集録』第39号, 2006, pp.47-54.
- (7) 宮重徹也「研究室紹介記事－富山商船高等専門学校国際流通学科助手－宮重徹也(経営戦略)研究室」『高等専門学校の教育と研究』第11巻第4号, 2006, pp.33-43.
- (8) 宮重徹也「2005年度卒業研究ゼミ合宿の目的と効果」『富山商船高等専門学校研究集録』第40号, 2007, pp.41-48.
- (9) 宮重徹也「2006年度卒業研究ゼミ合宿の報告－番外編－」『高等専門学校の教育と研究』第12巻第4号, 2007, pp.33-35.
- (10) 宮重徹也「高専3・4年生におけるキャリア教育」『高等専門学校の教育と研究』第13巻第1号, 2008, pp.35-40.